

# 峡北消防本部消防署所適正配置計画（案）

～北杜市内の消防署所再編について～

令和 3 年 2 月

峡北広域行政事務組合消防本部

# 目 次

第 1 章	消防署所の再編に係る検討経緯	1
第 2 章	地域の現況と災害の発生状況	6
第 3 章	現状消防力の運用効果	12
第 4 章	消防署所配置の検討	14
第 5 章	消防署所の配置計画案	23

# 第 1 章 消防署所の再編に係る検討経緯

## 1.1 消防体制の現状と課題

### (1) 消防庁舎の老朽化、未耐震等への対策

峡北消防本部の消防庁舎は、新築された葦崎消防署、双葉分署、及び改築が進められている北杜消防署を除き、他の 4 つの分署は建築後 50 年余りが経過しており、庁舎の老朽化が進んでいる。

また、これらの分署は、建築基準法に基づく昭和 56 年の新耐震基準の施行以前の建物であることから、大規模地震災害時の防災拠点として十分な役割が果たせるよう、速やかな庁舎整備が必要とされている。

表 1.1 各署所の庁舎概要（令和 2 年 4 月 1 日現在）

No.	施設名	敷地面積 ( m <sup>2</sup> )	延床面積 ( m <sup>2</sup> )	構造 階数	竣工	経過 年数	耐震 基準
1	峡北消防本部 葦崎消防署	5,127.55	2,959.98	RC 2/0	H29.4	3	新
2	葦崎消防署須玉分署	891.66	234.89	RC 2/0	S46.3	49	旧
3	葦崎消防署白州分署	1,352.59	262.64	RC 2/0	S46.3	49	旧
4	葦崎消防署双葉分署	1,467.74	339.69	RC 2/0	H24.10	7	新
5	北杜消防署	1,016.69	444.67	RC 2/0	S46.3	49	旧
6	北杜消防署高根分署	1,026.25	262.63	RC 2/0	S46.3	49	旧
7	北杜消防署小淵沢分署	830.53	206.23	RC 1/0	S52.12	42	旧

### ※消防署所の設置経過

当消防本部は、昭和 45 年に 1 本部、2 署(葦崎、長坂)、3 分署(須玉、高根、白州)で、峡北地区消防組合として発足し、消防業務を開始した。その後、昭和 52 年に中央自動車道の救急対策として長坂消防署小淵沢分遣所を設置し、救急車のみ配備していたが、平成 23 年には、名称を「北杜消防署小淵沢分署」に改め、その後、消防ポンプ

自動車を配備した。また、平成 25 年には葦崎消防署双葉分署を新設して現在に至っている。

## (2) 署所集約による消防力の強化

峡北消防本部の消防署及び分署の多くは中山間地域に位置し、署所数が多くなっていることが特徴である。このため、消防車両の整備数は国で示す「消防力の整備指針」による基準を上回っている一方で、消防車両に対する職員充足率は県内でも低い状況となっている。

また、消防車両は限られた人員で運用することから、消防車と救急車との乗換運用や、基準よりも少ない人員での消防車の運用を行っているのが現状であり、火災と救急への同時対応や、多くの部隊の集結が必要となる災害に効率的に対応することが困難となっている。

このような状況を解消するためには、分散している消防力を集約して各署所の消防力の強化を図ることが必要である。

## (3) 消防力の維持と効率的な運用へ向けた対応

人口減少、高齢化の進展、人口重心位置の変化など、近年の社会情勢の変化により、今後の消防行政の運営は、全国的にますます厳しくなることが予想される。その一方で、警防・予防業務の複雑・多様化、救急業務の増加・高度化、大規模化する災害への対応など、消防に求められる役割は年々大きくなっている。

このような状況に鑑み、現在国においては、小規模消防本部の統合や消防機能の共同運用などが推進され、消防力の向上を図るための各種取り組みが進められているところである。

峡北消防本部においても、厳しい財政状況の中で、署所の再編を検討し、限られた人員と消防資機材を活用した消防力の維持と効率化を進める必要があり、平成 30 年度に作成した「峡北消防本部消防署所再編整備計画（案）」では、次の観点から、署所再編の必要性が示されている。

### ①人口減少や厳しい財政状況等への対応

今後の人口減少や構成市を取り巻く財政状況を考慮すると、現在北杜市内にある 5 署所の消防庁舎を維持していくことは厳しくなるため、将来を見据えた消防サービスの在り方について検討する必要がある。

### ②消防署所の適正配置の必要性

主要幹線道路等の道路交通網の大幅な整備が進んでいることと、車両動態位置管理システム等の導入により、現場に最も近い車両が直近選別機能で選択されて出動

することができるため、緊急車両の現場到着時間は短縮されている。

一方、一部の山間地域では、依然として消防署からの到着に比較的多くの時間を要するところがあり、これらの地域を含め、管轄全域の消防需要を効果的に守備することが求められる。これらの条件も考慮して、峡北地域の実態に適した署所数の再編、配置の見直し及び署所機能の充実による消防力の向上、強化が必要である。

### ③消防署所の再編による効率化

署所の再編に伴い、一部の人員や車両を集約し適正配置することで、現行の消防力を大きく低下させることなく、災害発生時の初動体制の強化、2次出動体制の人員の充実を図ることができる。

### ④災害対応力の向上

署所の再編により大規模災害への対応力強化を図ると共に、大規模災害時に十分な応援・受援体制を確保できるよう、署所整備に伴い、署所機能の拡充を図る必要がある。

## 1.2 消防署所配置の検討経緯

### (1) 峡北消防本部消防署所再編整備計画(案)

平成30年度に作成した「峡北消防本部消防署所再編整備計画(案)」では、北杜市内の5署所を3署所に再編することが、効率的であることが示された(図1.1)。

### (2) 峡北広域行政事務組合消防本部消防力適正配置検討委員会による提言書

令和元年度に峡北広域行政事務組合消防本部消防力適正配置検討委員会が設置され、整備計画(案)について審議が行われた。その結果、同委員会から令和元年11月に提言書が提出され、釜無川エリア(国道20号沿い)に署所を配置する必要があること、北杜市内の署所は現状の5署所から4署所へ再編することが適当であることが提言された。

### (3) 北杜消防署の位置決定と整備方針

北杜消防署については耐震性が不足していることや、建て替えにあたって有利な財源とされる「緊急防災・減災事業債」の事業年度が令和2年度までとなっていたことを踏まえ、早期の建設候補地の選定が必要とされた。その後の検討により、北杜消防署は現在地で建替えを行うことが決定した。

整備計画(案)では、新「北杜消防署」の位置を現北杜消防署から南東へ約3kmの高根町五町田交差点付近とすることが示されていたが、新「北杜消防署」の位置が現在地に決定したことにより、北杜市内の北西部へのカバー率は向上するが、北東部の消

防力が低下してしまう恐れがあるため、分署の再編のあり方と適正な配置について、見直しを行う必要が生じた。

なお、建て替えにあたっては、北杜市内の消防業務の核として、署所再編で得られた人員により、韮崎消防署と同等の人員体制とする計画で北杜消防署の整備が進められている。

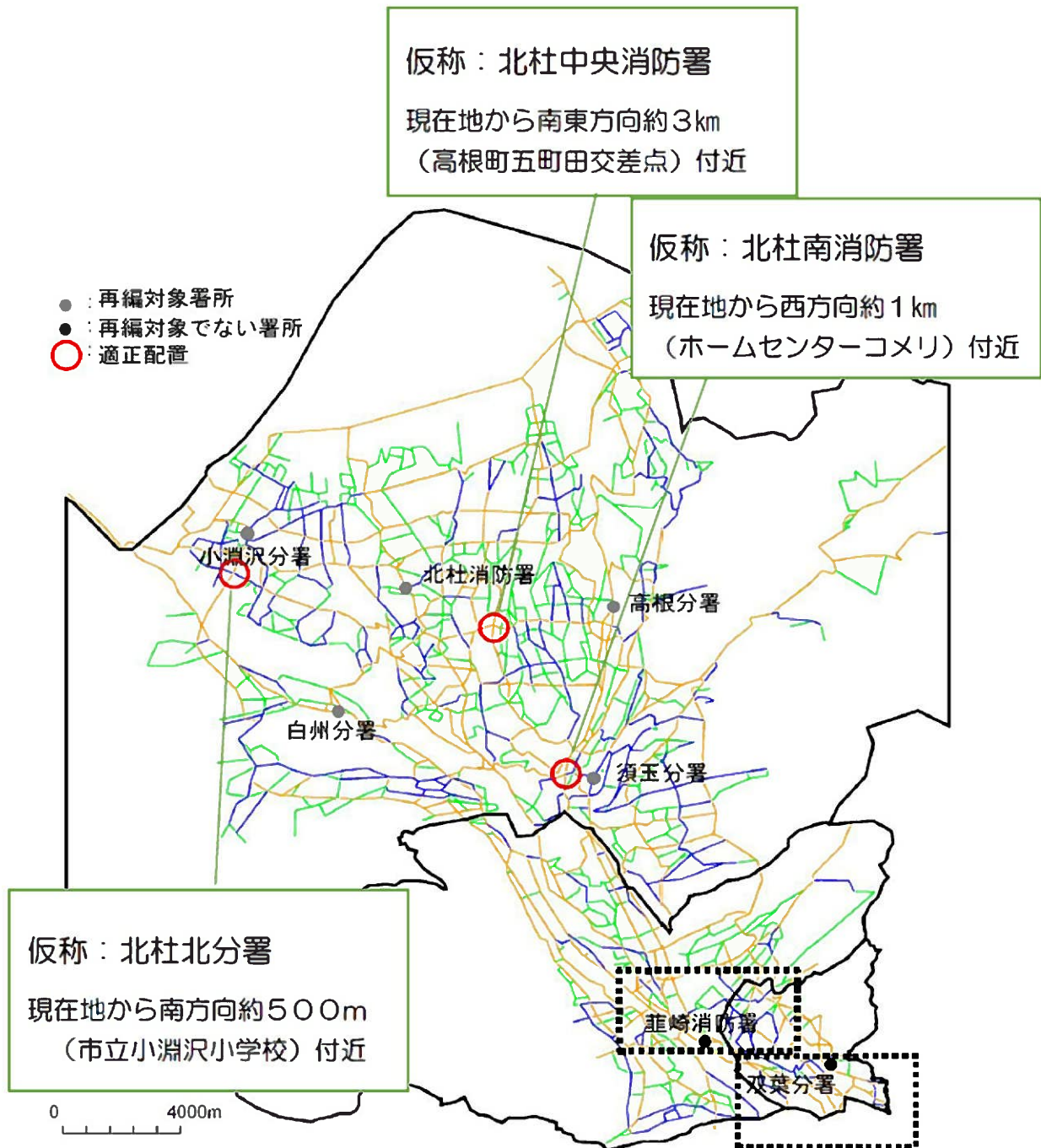


図 1.1 峡北消防本部消防署所再編整備計画(案)の適正位置

#### (4) 今後の検討内容

以上の経緯を踏まえ、北杜市内の署所については、現在の 5 署所(1 署 4 分署)から 4 署所(1 署 3 分署)へ再編すること、北杜消防署は現在地とすることを前提に、消防機能を維持しつつ、消防サービスの低下が最小限となるよう、4 分署から 3 分署へと統合する場合の配置について再検討を行うこととした。

## 第2章 地域の現況と災害の発生状況

分署位置の検討にあたっては、人口分布、災害発生状況、道路状況等を最新データに更新し検討を行う。地域の現況と災害の発生状況は以下の通りである。

### 2.1 地域の現況

峡北広域行政事務組合消防本部は葦崎市・北杜市・甲斐市（旧双葉町）を構成区域とする（図 2.1）。管轄区域の面積と人口、世帯数、中高層建物数、危険物施設数を表 2.1 に、これらの分布図を図 2.2 に示す。

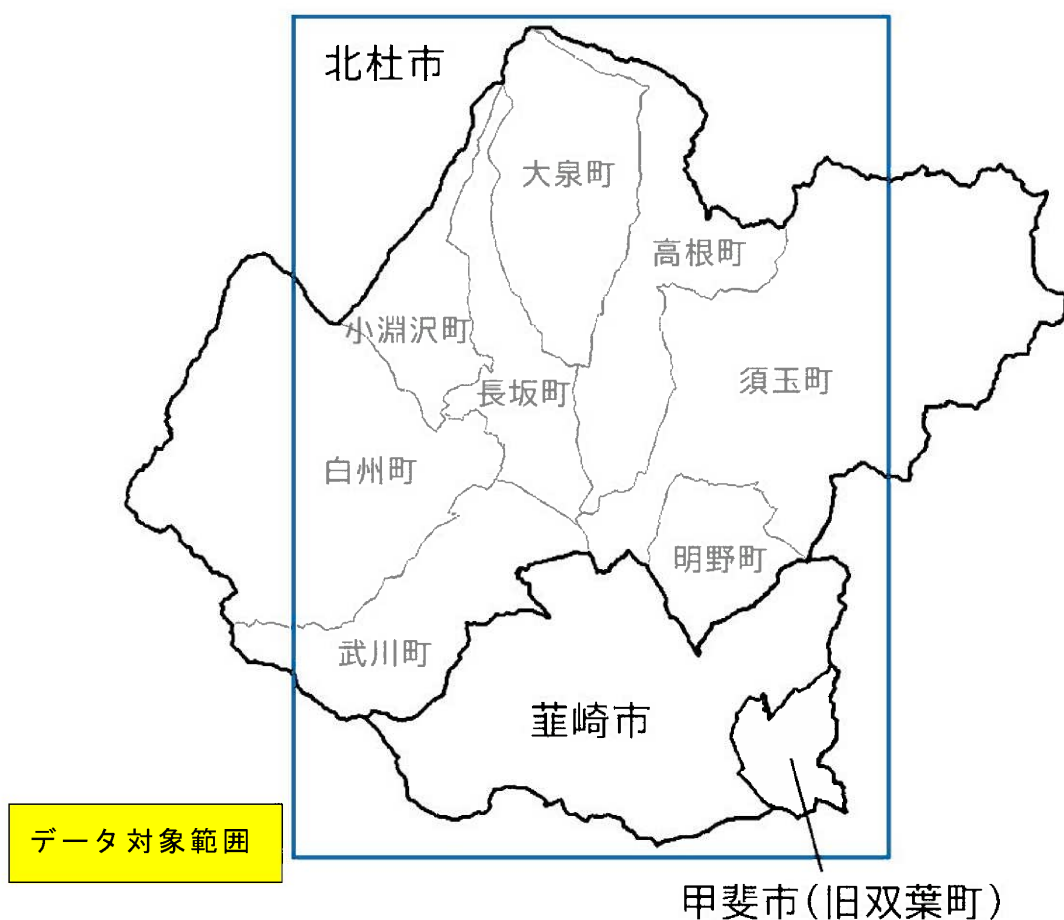


図 2.1 管轄区域

表 2.1 人口、世帯数、中高層建物数、危険物施設数（令和 2 年 4 月 1 日現在）

管轄区域	面積 (km <sup>2</sup> )	人口	世帯数	中高層建物数	危険物施設数
葦崎市	143.69	29,124	12,652	190	95
北杜市	602.48	46,421	21,421	256	204
甲斐市(旧双葉町)	18.86	16,573	6,945	70	29
計	765.03	92,118	41,018	516	328



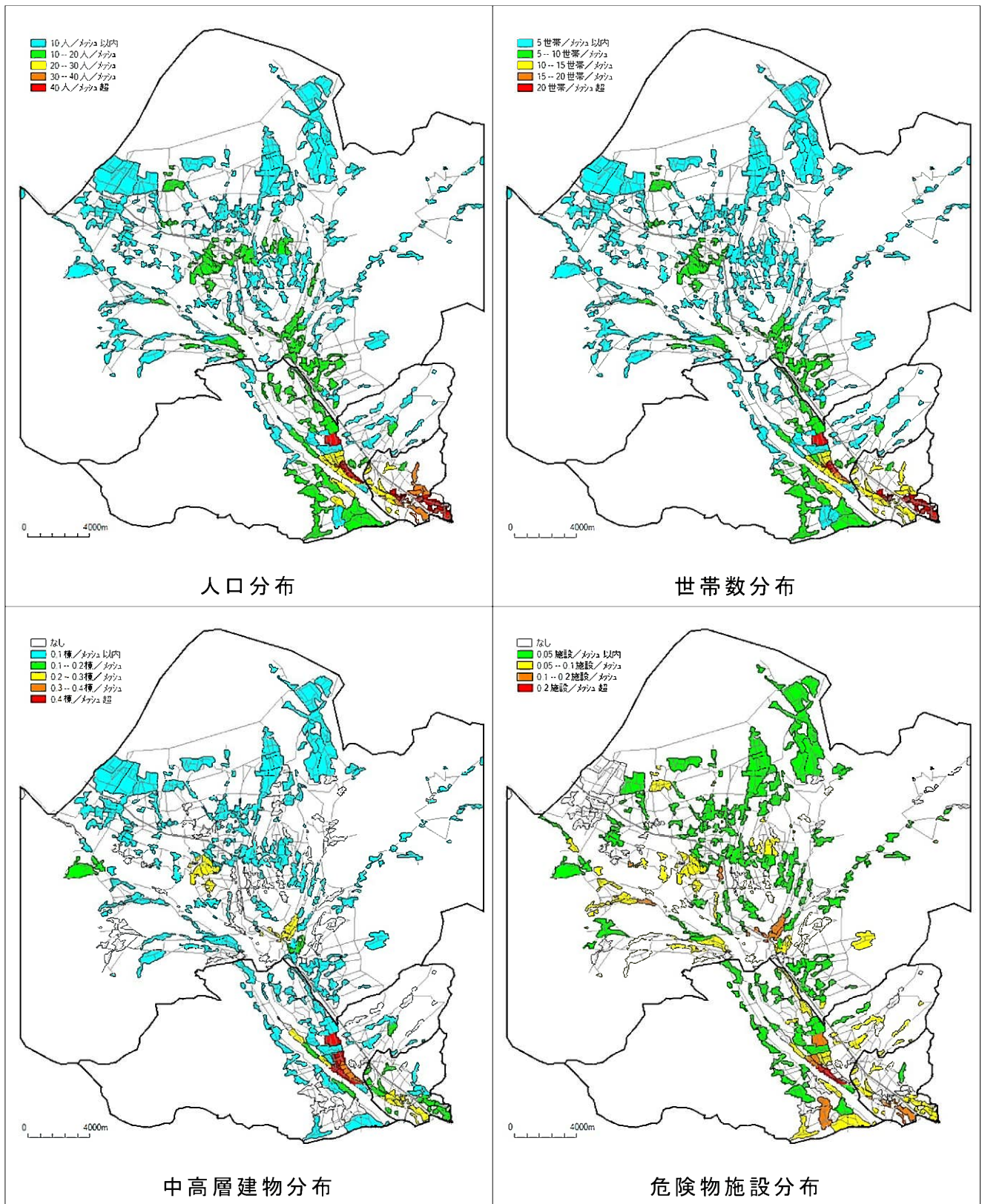


図 2.2 管内の人口・世帯数分布等

※1メッシュの大きさは、およそ東西140m、南北116mである（以下同様）。

## 2.2 災害の発生状況

### (1) 火災、救急、救助事案

火災、救急、救助事案の発生件数を表 2.2 に、これらの分布図を図 2.3 に示す。

表 2.2 火災・救急・救助事案の発生件数

管轄区域	火災事案 (2015-2019 年)	救急事案 (2017-2019 年)	救助事案 (2015-2019 年)
韮崎市	76	4,014	103
北杜市	210	7,232	203
甲斐市 (旧双葉町)	29	1,796	42
高速道路	7	144	11
計	322	13,186	359

注) 管轄区域外への出勤を除く。

### (2) 消防需要の指標化

本調査では、火災事案及び救急事案の双方を考慮した消防需要の指標値を算出し、この指標値に基づき消防署所配置の検討を行う。消防需要指標値は次のように求められる。

消防需要指標値 = 火災需要指標値 + 救急需要指標値

火災需要指標値 =  $50,000 \times (\text{地区の火災件数} / \text{管内の総火災件数})$

救急需要指標値 =  $50,000 \times (\text{地区の救急事案件数} / \text{管内の総救急事案件数})$

\*地区の火災件数には、世帯比例の火災件数 (推計値) を用いる。

管内全域における消防需要を 100,000 とした場合の消防需要の指標値を表 2.3 に、消防需要指標値の分布を図 2.3 (右下) に示す。

表 2.3 消防需要の指標値

管轄区域	火災需要			救急需要		消防需要 指標値
	世帯数	火災事案 (件/年)	指標値	救急事案 (件/年)	指標値	
韮崎市	12,652	15.9	12,346	1,362.0	15,494	27,839
北杜市	21,421	42.7	33,152	2,434.7	27,696	60,848
甲斐市 (旧双葉町)	6,945	5.8	4,503	598.7	6,810	11,313
計	41,018	64.4	50,000	4,395.3	50,000	100,000

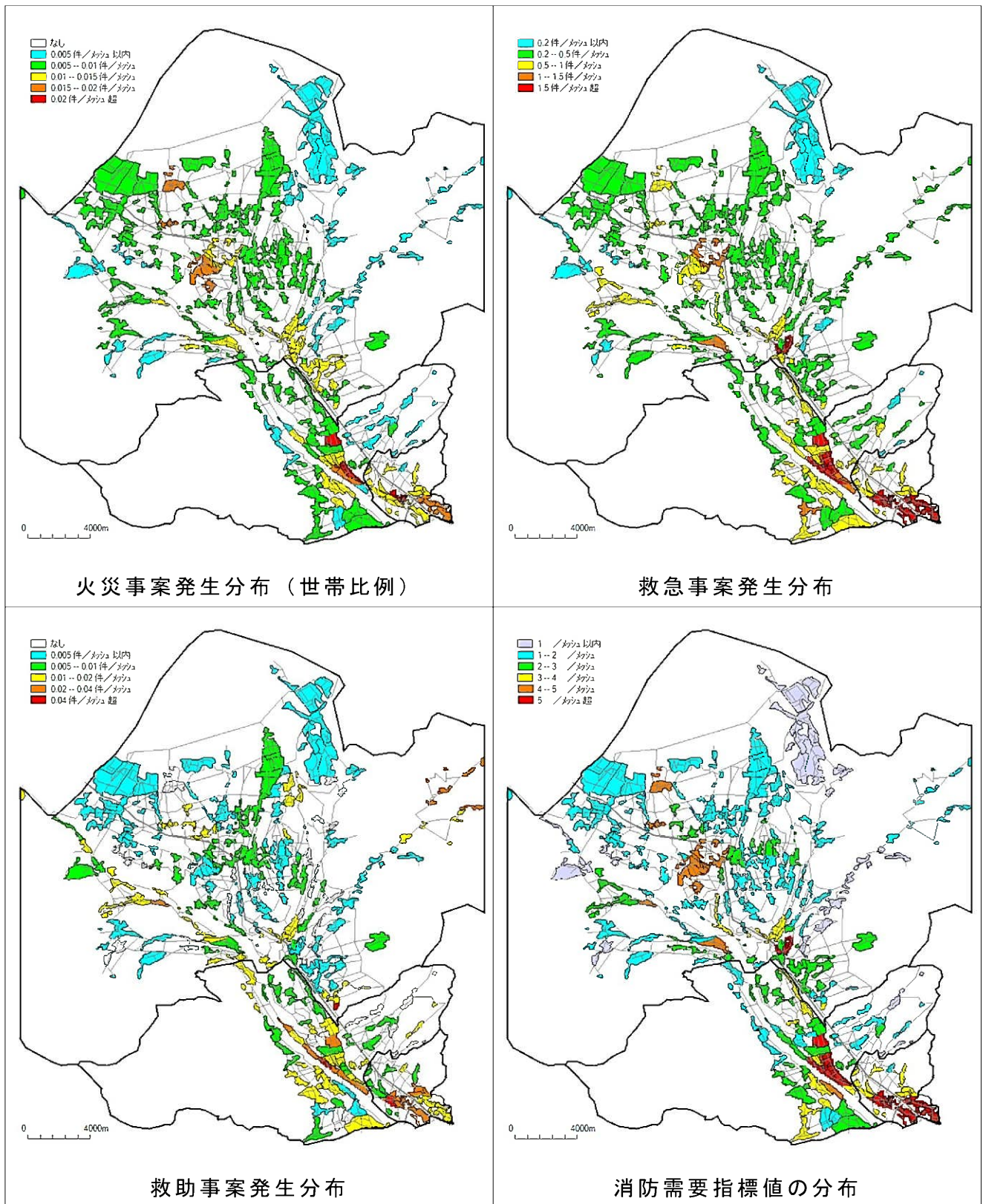


図 2.3 管内の災害発生分布、消防需要指標値の分布

※火災事案発生分布（世帯比例）は、火災事案の発生が世帯分布に比例すると仮定した場合の推定値である。

※消防需要指標値の分布は、火災事案（世帯比例）及び救急事案の需要を、1対1の割合で指標化したものである。

### 2.3 消防力の配置状況

管内の道路ネットワーク及び現状の消防署所配置を図 2.4 に示す。各署所に配置される消防車両は、これらの道路ネットワークの最短時間となるルートを走行して出動するものとする。そのときの走行速度は、図に色分けして示したとおりである。

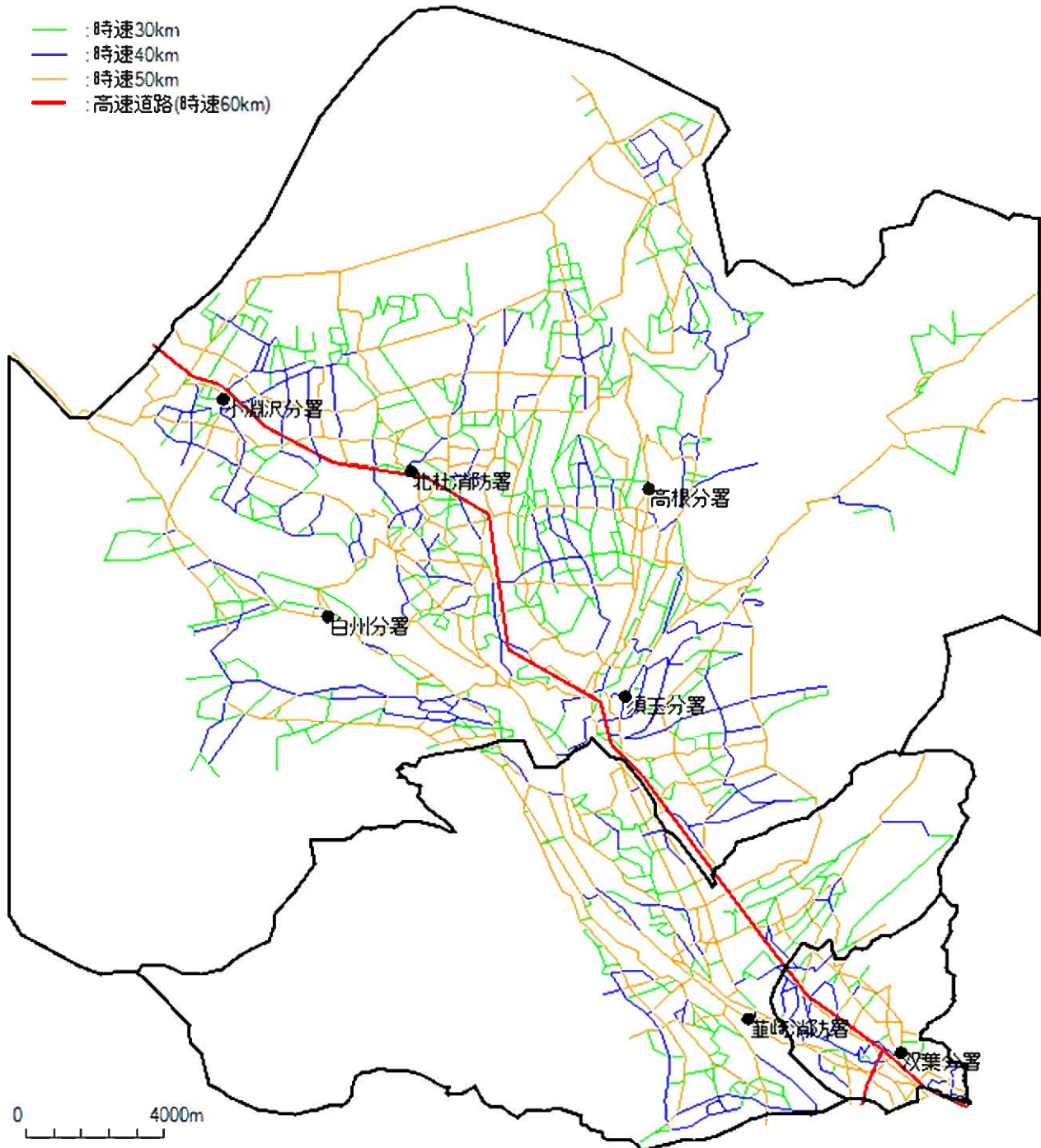


図 2.4 道路状況と現状署所位置

各署所に配置される消防車両は、表 2.4 の通りである（表には評価対象とする車両のみを示している）。

表 2.4 各署所の消防車両配置

消防署所名	消防車両台数(予備車は除く)				
	ポンプ車	タンク車	救急車	はしご車	救助工作車
葦崎消防署	1	1	2	1	1
葦崎消防署須玉分署	1		1		
葦崎消防署白州分署	1		1		
葦崎消防署双葉分署	1		1		
北杜消防署	1	1	1		1
北杜消防署高根分署	1		1		
北杜消防署小淵沢分署	1		1		
計	7	2	8	1	2

### 第3章 現状消防力の運用効果

現状の消防署所配置（図 2.4）を前提に、消防署所の運用効果を算定する。

消防署所の運用効果は、消防需要指標値（※）に対する消防車両（最先着）の到着状況により評価する。

※消防需要指標値とは、火災事案（世帯比例）及び救急事案の需要を、1対1の割合で指標化したもの（第2章 2.2（2）P7参照）。

表 3.1 及び図 3.1 に、消防署所の運用効果の評価結果を示す。

なお、現状の消防署所の運用効果は、第 4 章以降において署所配置を検討する際の基準となるものであり、署所移転による運用効果を現状の運用効果と比較することにより、署所配置の妥当性を検討する。

表 3.1 消防署所の運用効果（現状体制）

区 域 名	消防需要 指標値	一定時間内に到着可能な災害の累積比率[%]				平均走行 時間[分]
		5分以内	10分以内	15分以内	20分以内	
葦 崎 市	27,839	44	96	100	100	5.4
北 杜 市	60,848	39	85	97	100	6.4
明 野 町	5,048	20	82	100	100	7.1
須 玉 町	7,675	64	85	91	96	5.6
高 根 町	11,264	29	75	91	100	7.6
長 坂 町	12,574	46	98	100	100	5.3
大 泉 町	6,787	17	60	100	100	8.5
小 淵 沢 町	8,249	65	100	100	100	4.3
白 州 町	5,084	36	91	100	100	6.0
武 川 町	4,168	5	83	99	100	7.9
甲 斐 市 (旧 双 葉 町)	11,313	97	100	100	100	2.6
全 域	100,000	47	90	98	100	5.7

※比率は小数点以下、平均走行時間は小数点以下第2位で四捨五入して表示している（以下同様）。

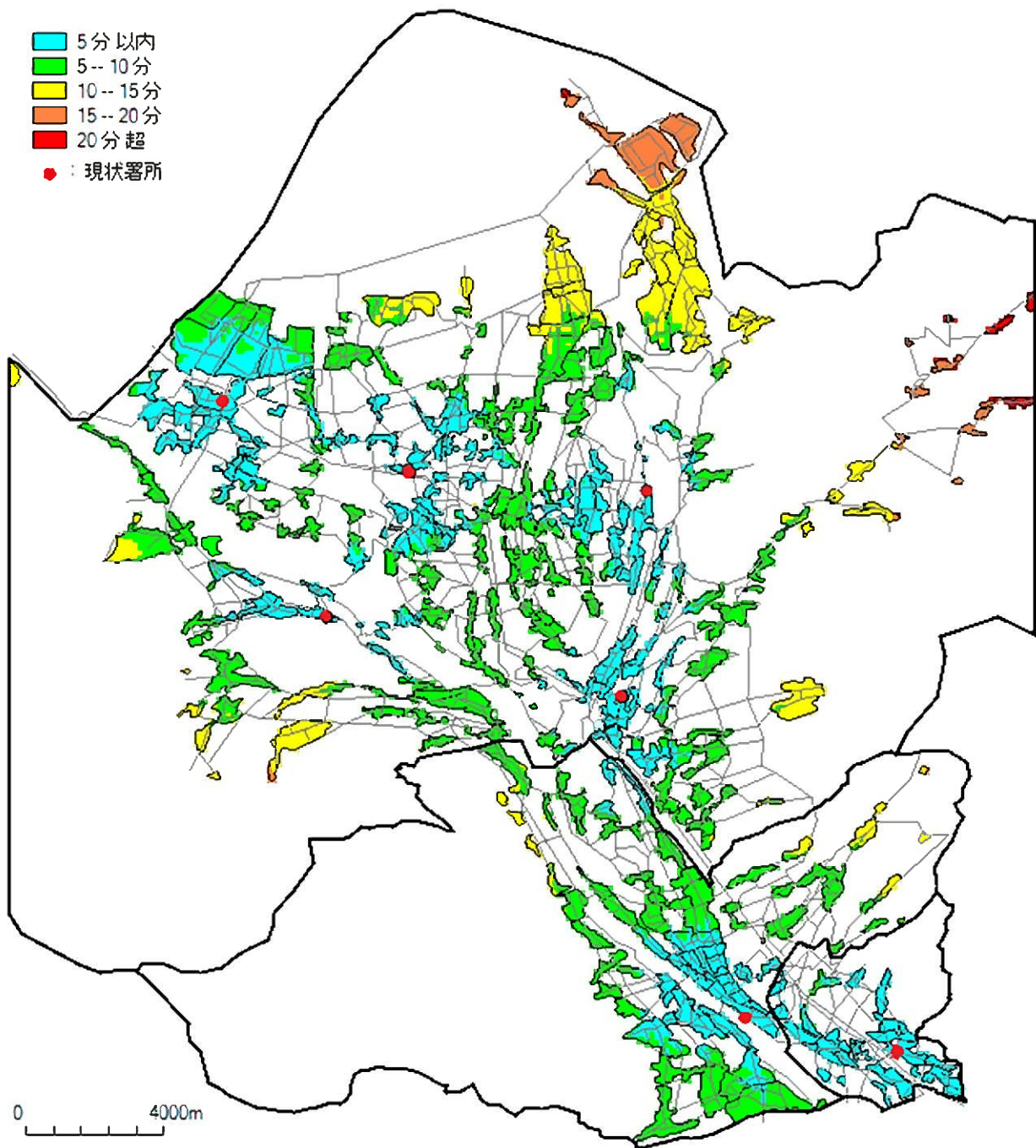


図 3.1 消防車両の走行時間分布

## 第4章 消防署所配置の検討

第1章において示した通り、北杜市内の署所については、現在の5署所(1署4分署)から4署所(1署3分署)へ再編すること、北杜消防署は現在地とすることを前提に、消防機能を維持しつつ、消防サービスの低下が最小限となるよう、4分署から3分署へと統合する場合の配置を検討する。

### 4.1 北杜市内の分署配置の検討方針

地形が複雑な上、広い面積を要する北杜市の場合、委員会の提言にもあるとおり「釜無川エリア」(緑点線部分)、及び「塩川エリア」(赤点線部分)の消防力を維持する必要があり、須玉分署及び白州分署をなくすことは適当ではない。

このことから、署所再編により1署3分署へと移行していく上で、地理的条件を加味した場合、台上と言われる「八ヶ岳エリア」(青点線部分)の分署のあり方を検討することが適当であり、新「北杜消防署」を起点として高根分署、又は小淵沢分署の機能を隣接する分署に統合し、これを補完する他の分署の位置を検討し、署所再編により生じる消防力の低下を軽減させ、市内の消防力の平準化に努める必要がある。

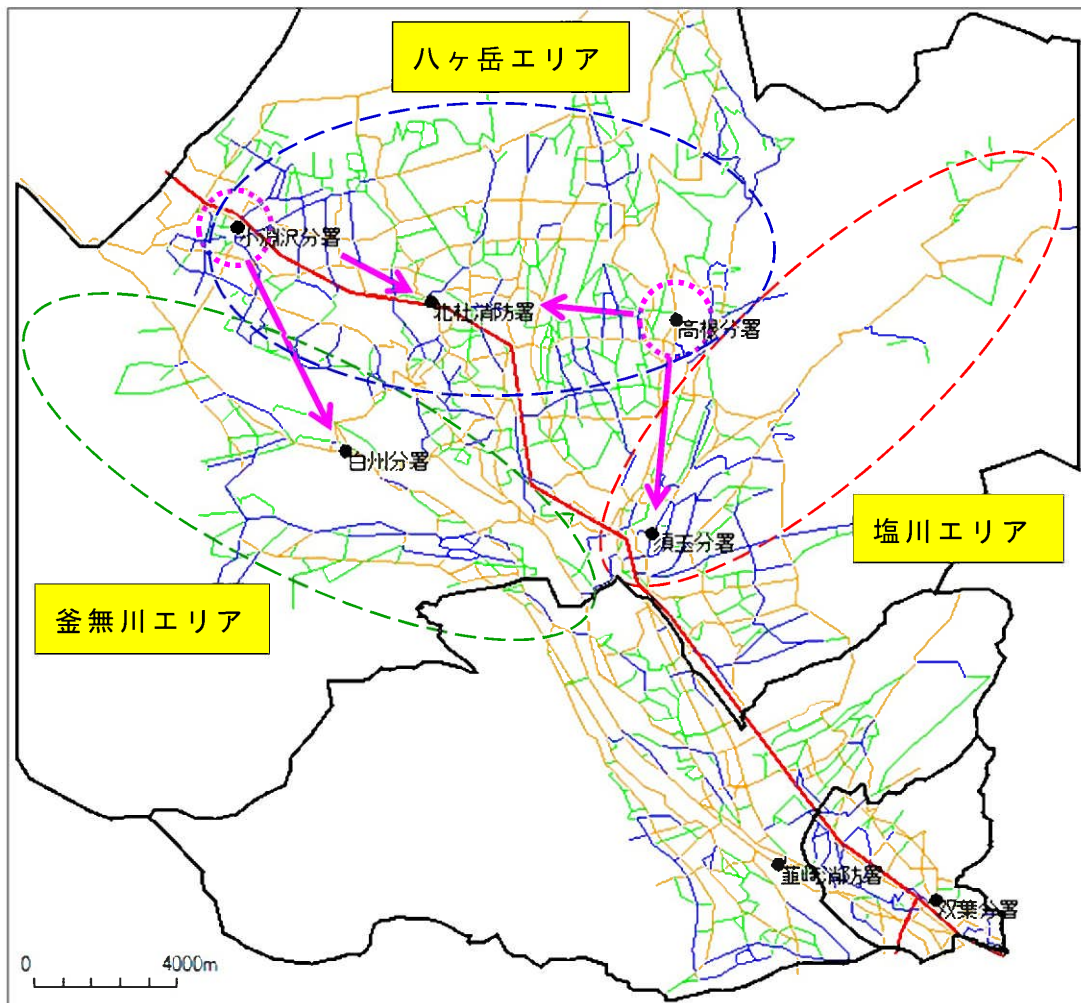


図 4.1 分署配置の考え方



## 4.2 消防需要のカバー率が最大となるような3分署の配置

分署統合の検討にあたり、はじめに、峡北消防本部の管内全域における消防需要のカバー率が最大となるような、3分署の配置を確認する。算定結果から、須玉分署及び小淵沢分署は整備計画(案)とほぼ同じ配置となり、白州分署の現在地付近には配置されず、高根分署は現在地から3~4km北側に配置された(図4.2左)。

また、消防署所の運用効果は、北杜市全域では多少の低下にとどまるものの、白州町では大きく低下する(表4.1及び図4.2右)。

これらの結果から、再編にあたっては、まず小淵沢分署と白州分署の統合を考慮することが妥当であることが示唆されるが、統合分署の配置については、上記4.1の方針を踏まえ、さらなる検討が必要である。

表4.1 消防署所の運用効果(3分署の配置の試算結果)

区 域 名	消防需要 指標値	一定時間内に到着可能な災害の累積比率[%]				平均走行 時間[分]
		5分以内	10分以内	15分以内	20分以内	
韭 崎 市	27,839	44 -	97 (1)	100 -	100 -	5.4 -
北 杜 市	60,848	30 (-9)	87 (2)	97 -	99 (-1)	6.8 (0.4)
明 野 町	5,048	6 (-14)	79 (-3)	100 -	100 -	8.2 (1.1)
須 玉 町	7,675	60 (-4)	83 (-2)	89 (-2)	93 (-3)	6.3 (0.7)
高 根 町	11,264	18 (-11)	88 (13)	100 (9)	100 -	7.1 (-0.5)
長 坂 町	12,574	45 (-1)	98 -	100 -	100 -	5.4 (0.1)
大 泉 町	6,787	25 (8)	89 (29)	100 -	100 -	6.7 (-1.8)
小 淵 沢 町	8,249	43 (-22)	100 -	100 -	100 -	5.3 (1.0)
白 州 町	5,084	6 (-30)	60 (-31)	93 (-7)	100 -	9.7 (3.7)
武 川 町	4,168	0 (-5)	70 (-13)	94 (-5)	100 -	9.5 (1.6)
甲 斐 市 (旧 双 葉 町)	11,313	97 -	100 -	100 -	100 -	2.6 -
全 域	100,000	41 (-6)	91 (1)	98 -	100 -	6.0 (0.3)

※括弧内の数値は、現状の運用効果の値との差分を表す(以下同様)。

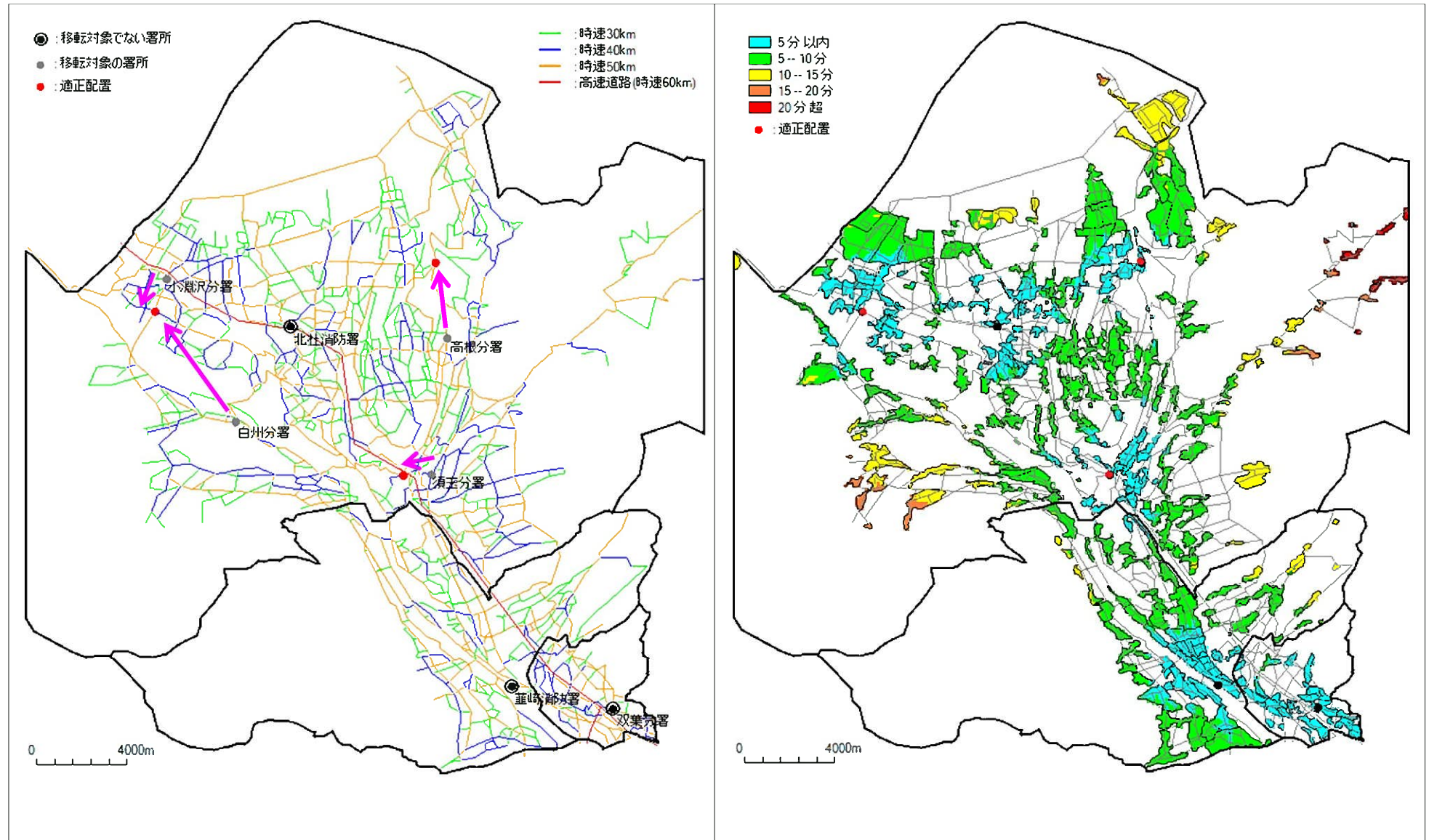


図 4.2 消防需要のカバー率が最大となるような3分署の配置（左：署所配置右：走行時間分布）

### 4.3 統合する分署の比較検討

次に、白州分署へ小淵沢分署の機能を統合する場合と、須玉分署へ高根分署の機能を統合する場合のそれぞれについて、新分署の配置を検討する。

#### (1) 白州分署へ小淵沢分署の機能を統合する場合

北杜消防署、須玉分署、高根分署を現状位置とし、残る 1 箇所の分署について、全域における消防需要のカバー率が最大となるような配置を算定したところ、結果は図 4.2 左と同じであったが、委員会の提言や、白州町の運用効果が大きく低下することを踏まえ、算定位置からやや南下した国道 20 号との交差点付近への配置を考える(図 4.3 左)。

消防署所の運用効果の算定結果を表 4.2 及び図 4.3 右に示す。

表 4.2 消防署所の運用効果（白州分署へ小淵沢分署を統合）

区 域 名	消防需要 指標値	一定時間内に到着可能な災害の累積比率[%]				平均走行 時間[分]
		5分以内	10分以内	15分以内	20分以内	
韭 崎 市	27,839	44 -	96 -	100 -	100 -	5.4 -
北 杜 市	60,848	29 (-10)	77 (-8)	97 -	100 -	7.3 (0.9)
明 野 町	5,048	20 -	82 -	100 -	100 -	7.1 -
須 玉 町	7,675	64 -	85 -	91 -	96 -	5.6 -
高 根 町	11,264	29 -	75 -	91 -	100 -	7.6 -
長 坂 町	12,574	42 (-4)	97 (-1)	100 -	100 -	5.6 (0.3)
大 泉 町	6,787	17 -	60 -	100 -	100 -	8.5 -
小 淵 沢 町	8,249	4 (-61)	74 (-26)	100 -	100 -	8.4 (4.1)
白 州 町	5,084	34 (-2)	82 (-9)	100 -	100 -	6.5 (0.5)
武 川 町	4,168	0 (-5)	34 (-49)	93 (-6)	100 -	11.2 (3.3)
甲 斐 市 (旧 双 葉 町)	11,313	97 -	100 -	100 -	100 -	2.6 -
全 域	100,000	41 (-6)	85 (-5)	98 -	100 -	6.2 (0.5)

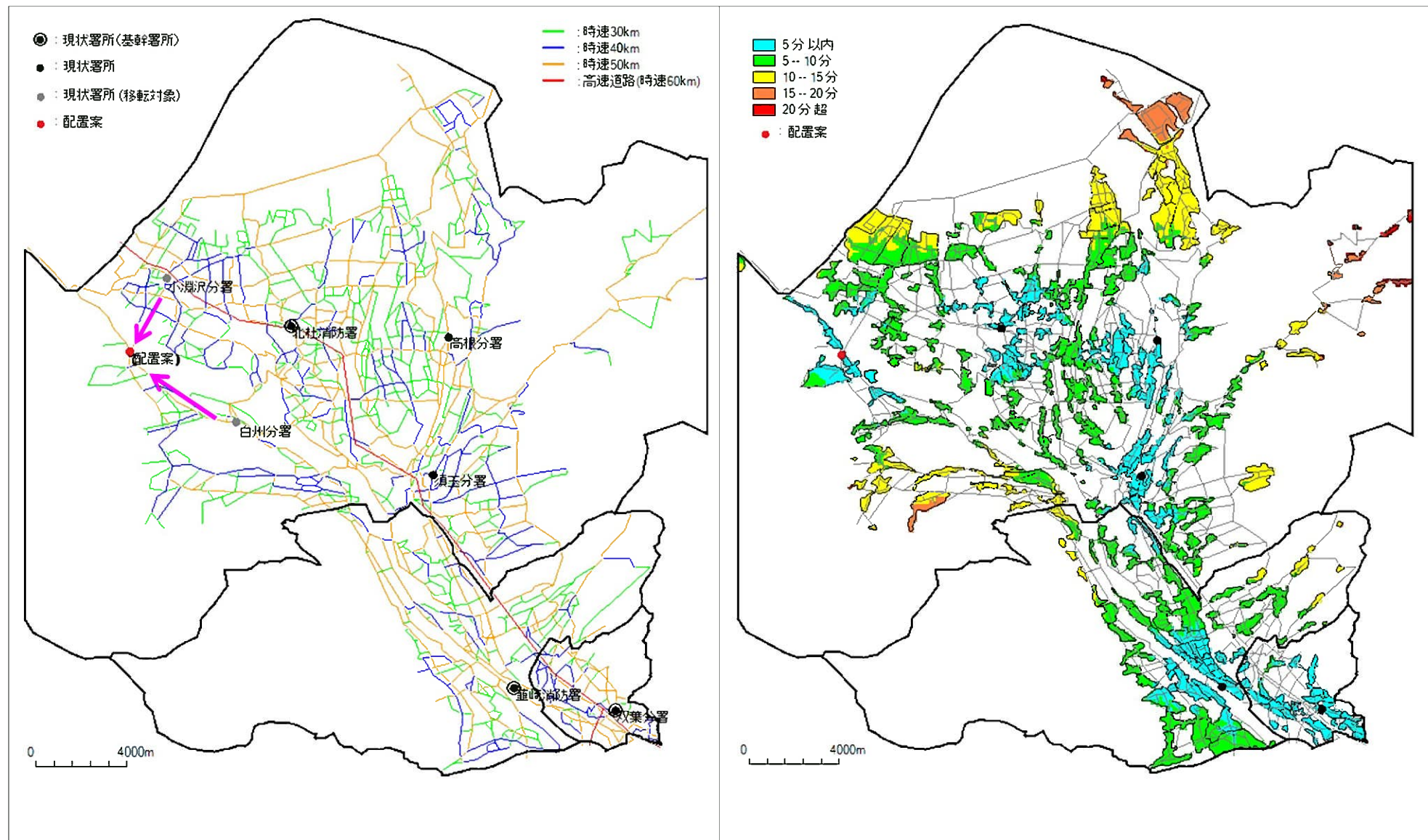


図 4.3 白州分署へ小淵沢分署の機能を統合（左：署所配置右：走行時間分布）

消防署所の運用効果の算定結果から、統合分署を国道 20 号沿いに配置することにより、白州町の運用効果の大きな低下が避けられることがわかる。小淵沢町の運用効果は低下するものの、北杜消防署の人員を増強することにより、隣接する小淵沢町への出動がし易くなり、現状よりも手厚い体制をとることができる。また、高速道路やドクターヘリの活用を強化することも対応策の一つとして考えられる。

その他、須玉分署が現状位置のまま白州分署が移転した場合には、武川町の運用効果が低下するため、将来的には須玉分署の移転を検討する必要がある。

これらの算定結果から、課題及び課題への対応を整理すると表 4.3 のようになる。

表 4.3 白州分署へ小淵沢分署の機能を統合する場合の課題と課題への対応

課題	課題への対応
小淵沢町の運用効果が低下する。	<p>○北杜消防署の人員増強</p> <p>北杜消防署からのポンプ車（第 2 着隊）の出動や、統合分署の救急車が出動中の場合における、北杜消防署からの救急車の出動が強化される。</p> <p>○北杜消防署に近接する高速道路入口の利用の強化</p> <p>八ヶ岳 PA から高速道路を利用して小淵沢町へ出動した場合には、到着時間の短縮が見込まれる。</p> <p>○ドクターヘリの積極的活用</p> <p>北杜市内には、ドクターヘリの着陸地点が数多く設定されていることから、重傷者等の救急搬送にあたって、積極的に活用する。</p>
武川町の運用効果が低下する。	<p>○須玉分署の移転</p> <p>須玉分署が現在地より 1km ほど西側に移転することで(図 4.2 左参照)、武川町の運用効果の大きな低下が避けられる。</p>

(2) 須玉分署へ高根分署の機能を統合する場合

北杜消防署、白州分署、小淵沢分署を現状位置とし、残る 1 箇所の分署について、全域における消防需要のカバー率が最大となるような配置を算定した結果、須玉分署の現状位置から 1km ほど北側の位置となった（図 4.4 左）。

消防署所の運用効果の算定結果を表 4.4 及び図 4.4 右に示す。

表 4.4 消防署所の運用効果（須玉分署へ高根分署を統合）

区 域 名	消防需要 指標値	一定時間内に到着可能な災害の累積比率[%]				平均走行 時間[分]
		5分以内	10分以内	15分以内	20分以内	
韮 崎 市	27,839	43 (-1)	96 -	100 -	100 -	5.5 (0.1)
北 杜 市	60,848	34 (-5)	82 (-3)	94 (-3)	99 (-1)	7.0 (0.6)
明 野 町	5,048	7 (-13)	79 (-3)	99 (-1)	100 -	8.3 (1.2)
須 玉 町	7,675	63 (-1)	83 (-2)	91 -	97 (1)	5.8 (0.2)
高 根 町	11,264	11 (-18)	65 (-10)	75 (-16)	98 (-2)	10.0 (2.4)
長 坂 町	12,574	46 -	98 -	100 -	100 -	5.2 (-0.1)
大 泉 町	6,787	17 -	55 (-5)	100 -	100 -	8.7 (0.2)
小 淵 沢 町	8,249	65 -	100 -	100 -	100 -	4.3 -
白 州 町	5,084	36 -	91 -	100 -	100 -	6.0 -
武 川 町	4,168	5 -	83 -	99 -	100 -	7.9 -
甲 斐 市 (旧 双 葉 町)	11,313	97 -	100 -	100 -	100 -	2.6 -
全 域	100,000	44 (-3)	88 (-2)	96 (-2)	100 -	6.1 (0.4)

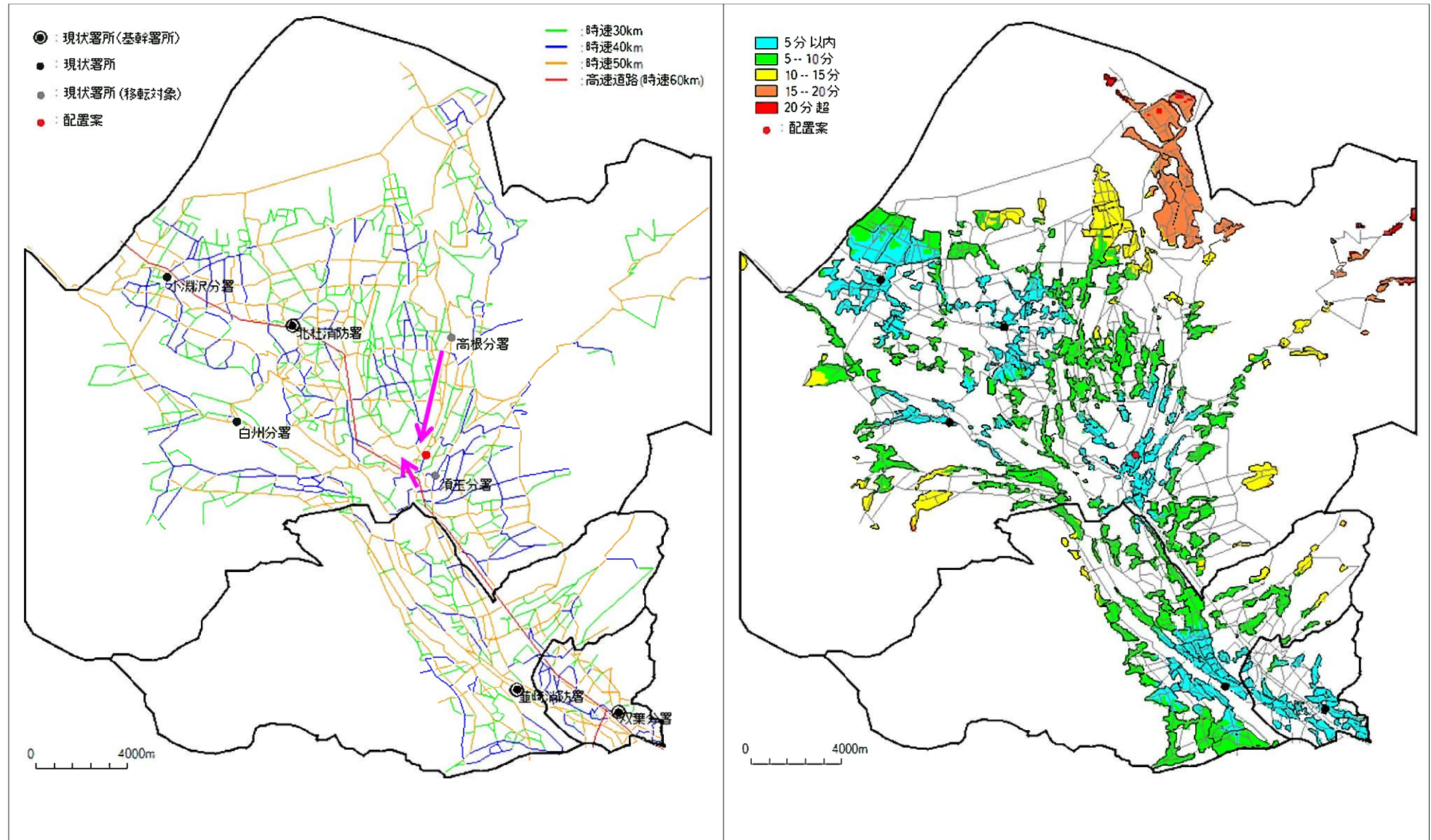


図 4.4 須玉分署へ高根分署の機能を統合（左：署所配置右：走行時間分布）

消防署所の運用効果の算定結果から、地域間の格差は比較的少ないが、消防需要の多い高根町において運用効果が低下し、特に高根町の北部では現場到着に 10 分以上かかる地域が増加している。

なお、須玉分署は、峡北消防本部管内の中心に位置することから守備範囲が広いが、高根分署を統合した場合には、さらに守備範囲が広がることとなる。また、須玉町の北東部や高根町の北部地域など、署所から距離のある地域を抱えているため、出動頻度が高くなると、直近の署所からの出動ができず、現場到着時間がさらに延長する可能性がある。

これらの算定結果から、課題及び課題への対応を整理すると表 4.5 のようになる。

表 4.5 須玉分署へ高根分署の機能を統合する場合の課題と課題への対応

課題	課題への対応
高根町の北部で大幅に現場到着時間が延びる。	<p>○須玉分署の配置の再検討</p> <p>須玉分署の配置を図 4.3 左に示す位置よりもさらに北側へ移すことで、高根町北部の現場到着時間の延長が緩和される（ただし、須玉町及びその周辺の地域では現場到着時間が延びる）。</p>
須玉町の第 2 着ポンプ車の運用効果が低下する。	<p>○須玉分署の人員増強</p> <p>須玉分署の人員を消防車両 2 台の運用が可能な体制とすることで、須玉町の第 2 着ポンプ車の運用効果の低下が避けられる。</p>
須玉分署の出動頻度が増加することにより、出動中の確率が高くなる。	<p>○須玉分署の人員増強</p> <p>須玉分署の人員を消防車両 2 台の運用が可能な体制とすることで、出動中の確率を低下させることができる。</p>

#### 4.4 分署統合の方向性

以上の検討結果から、白州分署へ小淵沢分署の機能を統合する場合（4.3(1)）が、北杜市内の消防力の配置バランスが良く、市内全体の消防力の低下を軽減することに繋がることから、これを分署統合案として検討を進めることが妥当と考えられる。

ただし、いくつか課題もあることから、前記した課題への対応や、他の分署の建替えにあたっては、北杜市内の消防力の平準化が図れるよう、配置を検討することが必要である。



## 第5章 消防署所の配置計画案

### 5.1 北杜市内の分署の配置

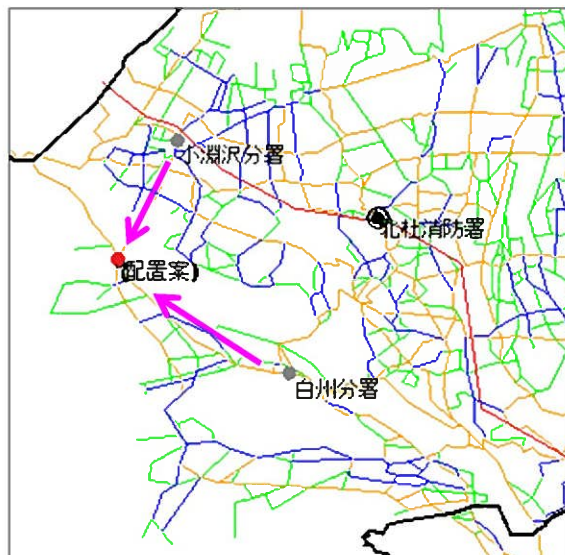
#### (1) 白州分署と小淵沢分署の統合と位置

これまでの検討結果から、北杜消防署の現在位置での建替えを前提とした場合には、白州分署と小淵沢分署との統合が妥当であることが示された。

また、統合分署の配置については、白州分署の現在地とした場合には、小淵沢町の消防需要への対応が難しく、逆に小淵沢分署の近隣とした場合には、白州町への対応が困難となる。

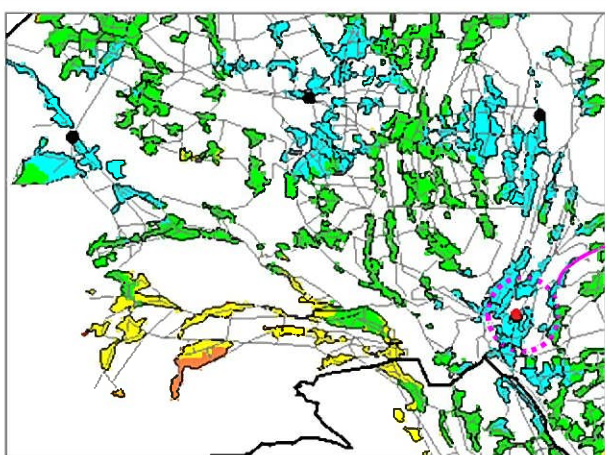
小淵沢町は北杜消防署からも比較的近く、応援出動が期待できる一方で、白州町は消防需要はそれほど多くないものの、地理的には最も消防署から遠い位置にあることから、一定の体制をとっておく必要がある。

これらを踏まえ、統合分署は、白州分署と小淵沢分署の中間地点に近い、国道20号沿いへの配置が適当と考えられる。

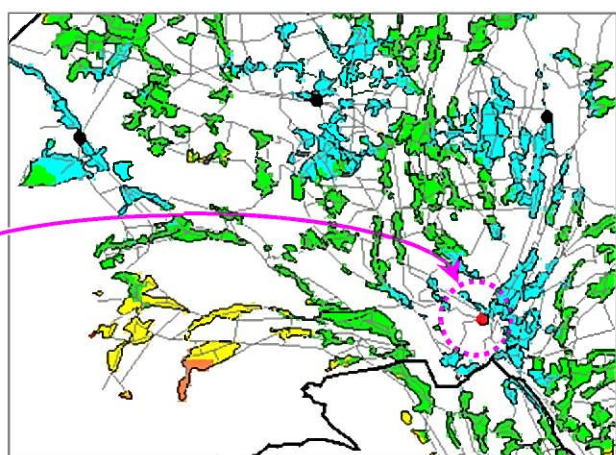


#### (2) 須玉分署の位置

白州分署が小淵沢分署と統合移転した場合には、武川町の運用効果の低下が見込まれるが、須玉分署を現在地から釜無川エリアにアクセスしやすい国道141号側へ移すことにより、武川町の中でも特に消防需要の多い東部の到着状況を改善し、効果的に運用効果の向上を図ることができる。



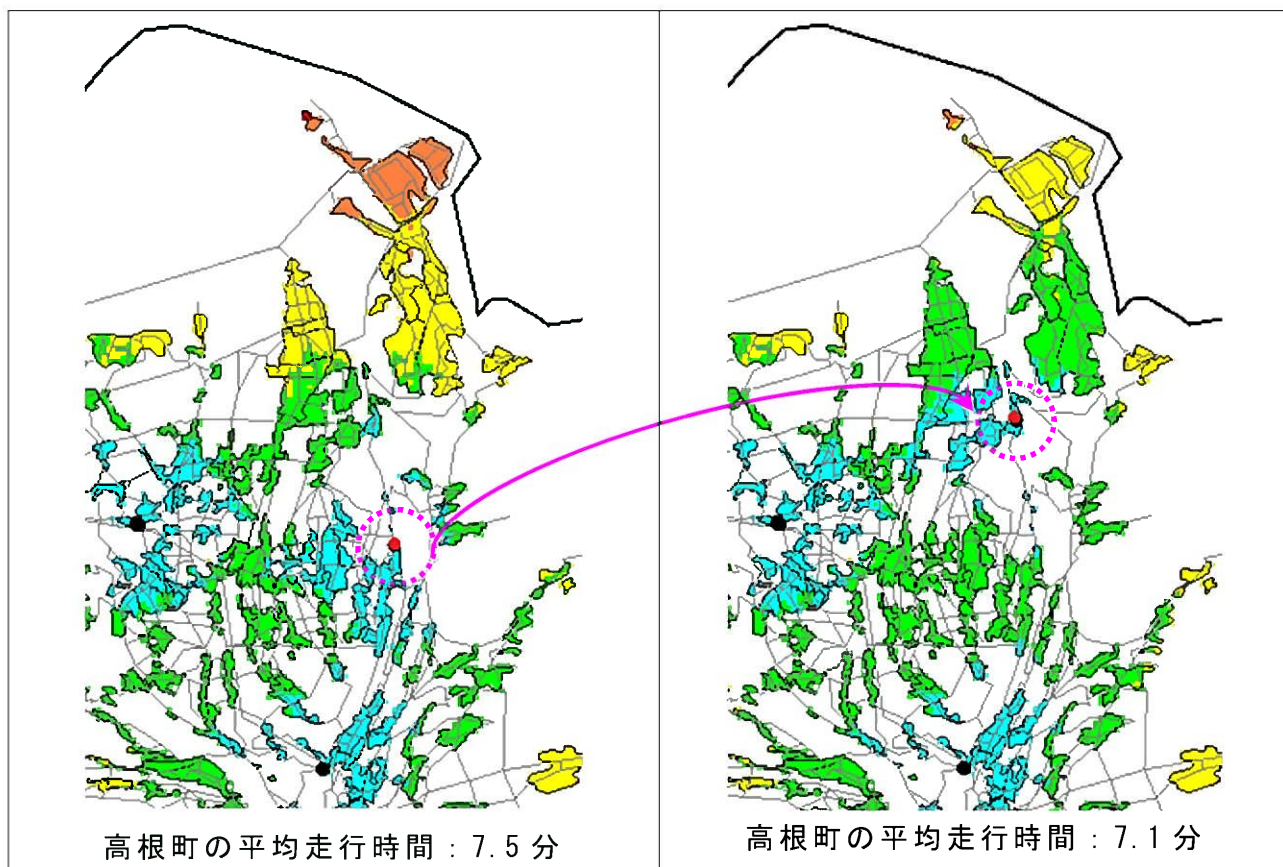
武川町の平均走行時間：11.2分



武川町の平均走行時間：9.5分

### (3) 高根分署の位置

高根分署については、現状の消防需要分布を考慮した場合、現在地から 3～4km 北側に移転することで運用効果の向上が見込まれる（下図参照）。ただし、高根町の消防需要分布は北部よりも南部の方が多いことから（図 2.2 及び 2.3 参照）、高根分署が北上した場合には、消防需要が多く分布する地域から離れることとなる。さらに、今後の人口減少にともない、消防需要も減少傾向に転じることが見込まれることから、高根分署については現在地周辺での建て替え・移転が適当であると考えられる。



## 5.2 配置計画案

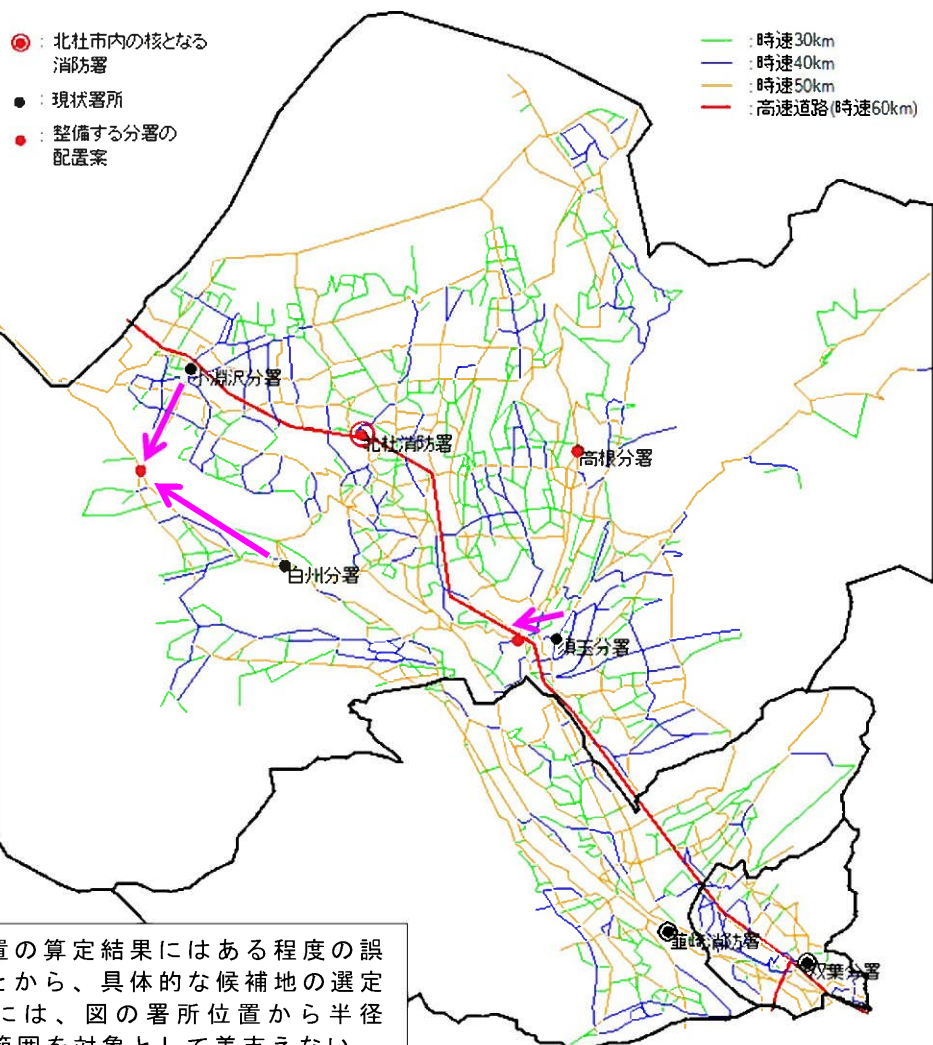
上記 5.1 で検討した分署の配置計画案を図 5.1 に、運用効果の算定結果を表 5.1 に、現状配置及び配置計画案における走行時間分布図を図 5.2 に示す。

第 4 章において、消防署所配置の検討を行ってきたが、署所機能を統合するだけでは、消防署所の運用効果の低下が生じることが懸念される。また、検討委員会の提言を受けとめた中で、消防機能を維持しつつ、消防サービスの低下が最小限となるよう 4 分署から 3 分署へと統合するには、統合する署所だけでなく、全体的な署所の配置も検討することが重要な課題となる。

そのような状況で、いくつかのパターンを試算し検討した結果、図 5.1 に示す署所配置の場合に、消防署所の運用効果は現状から大きく低下することがない試算結果となり、消防力の維持・強化を図れること、かつ消防サービスの充実が実現できる。

表 5.1 消防署所の運用効果（北杜市内の分署の配置計画案）

区 域 名	消防需要 指標値	一定時間内に到着可能な災害の累積比率[%]				平均走行 時間[分]
		5分以内	10分以内	15分以内	20分以内	
韮 崎 市	27,839	44 -	97 (1)	100 -	100 -	5.4 -
北 杜 市	60,848	29 (-10)	80 (-5)	97 -	100 -	7.2 (0.8)
明 野 町	5,048	6 (-14)	79 (-3)	100 -	100 -	8.2 (1.1)
須 玉 町	7,675	66 (2)	85 -	91 -	96 -	5.8 (0.2)
高 根 町	11,264	32 (3)	75 -	91 -	100 -	7.5 (-0.1)
長 坂 町	12,574	45 (-1)	97 (-1)	100 -	100 -	5.4 (0.1)
大 泉 町	6,787	17 -	60 -	100 -	100 -	8.5 -
小 淵 沢 町	8,249	4 (-61)	74 (-26)	100 -	100 -	8.4 (4.1)
白 州 町	5,084	34 (-2)	82 (-9)	100 -	100 -	6.5 (0.5)
武 川 町	4,168	0 (-5)	70 (-13)	95 (-4)	100 -	9.5 (1.6)
甲 斐 市 (旧 双 葉 町)	11,313	97 -	100 -	100 -	100 -	2.6 -
全 域	100,000	41 (-6)	87 (-3)	98 -	100 -	6.2 (0.5)



注) 適正配置の算定結果にはある程度の誤差を含むことから、具体的な候補地の選定を行う場合には、図の署所位置から半径500m程度の範囲を対象として差支えない。

図 5.1 北杜市内の分署の配置計画案

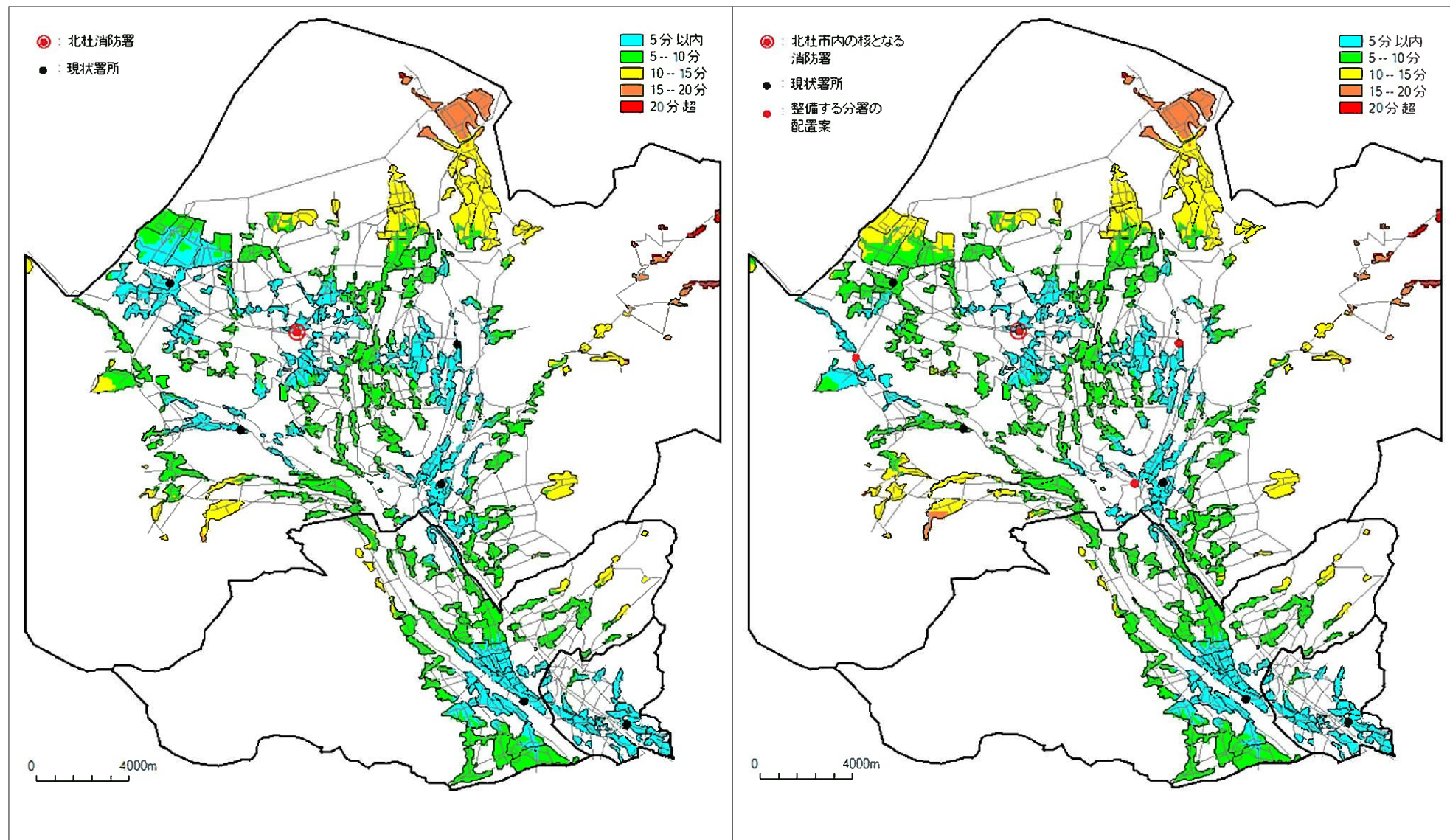


図 5.2 消防車両の走行時間分布 (左：現状署所配置 右：配置計画案)

### 5.3 署所再編による効果と課題への対応策

署所再編をすることにより、一部の地域では到着時間が延びることから、基幹消防署を核とした管内全域の消防力の強化を図ることが必要である。また、署所再編をすることで消防力（人員・車両）が集約され、出動体制の強化につながるというメリットもある。署所再編により期待される効果や課題への対応を整理すると、次のようになる。

#### (1) 基幹消防署を核とした管内全域の消防力の強化

現状において、葦崎消防署は初動で 3 隊運用が可能な人員が、北杜消防署では 2 隊運用が可能な人員が配置されている。署所再編によって得られた人員は北杜消防署に配置し、葦崎消防署と共に 3 隊運用が可能な体制とすることが計画されている。これにより、峡北消防本部管内は南部の葦崎消防署、北部の北杜消防署をそれぞれ基幹消防署とした充実した体制をとることが可能となる。

#### (2) 新「北杜消防署」の部隊運用の強化

北杜消防署の配備車両と配置人員が増強されることにより、次のような効果が見込まれる。

- ・ 出動可能な部隊が増えることにより、周辺地域への到着時間が短縮される。
- ・ 救急隊 2 隊配置となり、同時に 2 件の救急事案へ対応することが可能となる。
- ・ 救急隊 2 隊のうち 1 隊が専任となる予定であり、救急需要に確実に対応することができる。ととも、近年高度化している救急業務への対応強化を図ることができる。
- ・ ポンプ隊が救急隊と同時に救急事案に出動する運用（PA 連携）を強化することができる。
- ・ 救急隊 1 隊当たりの出動頻度を低減することができる。
- ・ 様々な災害への対応力が強化される（事案に応じて様々な出動体制を組むことが可能となる）。

#### (3) 小淵沢町の消防需要への対応

署所再編により、小淵沢町への到着時間が現状よりも延びることが見込まれるが、上記（1）、（2）に示した、北杜消防署の基幹消防署としての体制強化と部隊運用の強化を図ることにより、火災時のポンプ車（第 2 着隊）の出動や、統合分署の救急車が出動中の場合における北杜消防署からの救急車の出動を強化することができる。

また、近年では、主要幹線道路等の道路交通網の大幅な整備が進んでいることや、車両動態位置管理システム等の導入により、現場に最も近い車両が直近選別機能で選択されて出動することができるため、緊急車両の現場到着時間は短縮されているが、これに加え、北杜消防署に近接する高速道路入り口を利用することによる現場

到着時間の短縮や、ドクターヘリを積極的に活用した傷病者の処置の早期実施を図ることも可能と考えられる。

#### (4) 武川町の消防需要への対応

武川町についても、署所再編により到着時間が現状より延びることが見込まれるが、これへの対応として、須玉分署を現在地から西方向へ約 1km の国道 141 号側へ移すことにより、武川町の中でも特に消防需要の多い東部の到着状況を改善し、効果的に運用効果の向上を図ることができる。

#### (5) 中央自動車道の救急への対応

中央自動車道（高速道路）の救急事案に対しては、葦崎消防署及び北杜消防署から、それぞれ救急車 1 台、救助工作車 1 台が出動する体制となっている。北杜消防署の消防力が強化されることにより、高速道路上の事案に対しても出動体制の強化が図られることとなる。

なお、小淵沢分署は中央自動車道の救急対策として昭和 52 年に設置された経緯があるが、その後長坂 IC が開設されるとともに、八ヶ岳 PA からの進入も可能となるなど、出動体制も変わってきていることから、現在では小淵沢分署の救急対応の役割は終了している。

### 5.4 署所再編を進めるにあたっての優先性とスケジュール

北杜消防署は令和 3 年末までに完成予定であり、新「北杜消防署」の開所後早期に人員体制の増強を図ることを考えると、白州分署と小淵沢分署の統合・移転は、令和 4 年度以降なるべく早い時期に対応することが望ましい。

さらに、白州分署と小淵沢分署を統合・移転した場合には、武川町の運用効果が低下することが見込まれるため、消防力の空白域が生じることのないよう、須玉分署の移転についても早期対応が必要となる。

高根分署については、老朽化等への対応のため、早期の建替えが必要であるが、建替え時の人口動向や消防需要の分布も踏まえ、現在地周辺での建て替え・移転を検討する必要がある。

#### (スケジュール案)

年度	北杜消防署	統合分署	須玉分署	高根分署
R3	新庁舎完成	計画	計画	計画
R4	—	用地取得・設計	用地取得・設計	—
R5	—	建設・移転	建設・移転	用地取得・設計
R6	—	—	—	建設・移転